



好きな遊びだけしていい大丈夫？



保護者の方の
Q&A にお答えします

ずっと好きな遊びだけやっていいの？子どもたちに好きなことを選択させるとずっと同じ遊びはかりになるのでは？わがままになるのでは？といった声も聞かれます。

自由な時間の中では子どもたちの好きなことを、熱中してやっていて良いと思います。大人からすると、毎日一緒に見える遊びも、少し角度を変えてみたり、さらに奥深くなったりと子どもたちは毎日工夫を凝らして遊びを展開しています。子どもにとって遊びは、大切な学びです。好きな遊びを一つに絞って徹底することで、かえって学びが深くなり、複合的、多面的な学びになるのです。またそこに友達も加わることで、役割分担がなされ、様々なアイデアが足され、コミュニケーション力や社会性、創造力も強化されます。例えば、砂場でグループになって遊び込んでいる姿はまさにそれに値するものだと思います。様々な年齢の子どもが協働して、雨どいやスコップなどを使い、水を流す。一見単純に見えるこの遊びも、雨どいの角度に応じて水の量が変わったり、カーブの部分で水が溢れないように補強をしたりと算数や科学の学びになります。これを友だちと毎日繰り返し楽しく実践することで協働的問題解決能力も自然と身につきます。この中で、友だちと様々な葛藤も起こります。自分の思いと友だちの思いや意見の違いでトラブルになることもあります。そんな時には必要に応じてタイミングを見極めながら仲立ちをしています。

幼児期のわがままに見える行動は一時的なものなのです。発達段階の過程で人それぞれその度合いは違いますが、自己コントロール能力に欠ける行動を見せることがあります。これは誰しもが通っていく道のりです。好きな遊びだけしているから、わがままになるとイコールではありません。

みそらこども園の「見守る」って何？

「見守る」というとただ見ているだけのように感じますがそうではありません。保育の環境は、その子が今できることより、少しだけ背伸びの必要なものであることが大切です。例えば、赤ちゃんが物を取りたいと思うときには、その子が到達できる地点より少し先に欲しい物を置いておくとか、保育教諭に抱かれないと思えば、少し離れたところで抱くために待っているようにするのです。その子の発達をよく見て、その子の発達の少し先に課題を置くために、発達過程を理解することが保育教諭の専門性のひとつです。また、保育教諭自身も子どもにとって環境のひとつとしての役割を担っています。子どもが大人とのかかわりを求める何らかのサインを出したときには、必ず気づいてこたえなければなりません。そのために保育教諭は子どもに密着するのではなく、いつも少し離れたところで「見守る」必要があります。子どもが欲していることを「**やってあげる**」のではなく、かといってただ「**見ている**」だけではなく、ひとりひとりの子どもの発達過程をしっかりと「**見る＝一人ひとりを理解する**」そして子どものやりたいを保證する「**守る＝適切な援助をする。環境を用意する**」、それが見守る保育なのです。

参考文献：MIMAMORU 見守る保育 藤森平司



みそらこども園では毎月保育ウェブで子どもの姿に合わせ、遊びを保證するために何が必要かをクラス会議で話し合っています。

